令和元年度第２回　鎌ケ谷市子ども・子育て会議　会議録

１　日時　令和２年１月９日（木）　１０：００～１１：４０

２　場所　鎌ケ谷市役所本庁舎６階　第１・第２委員会室

３　出席委員

山本幸子委員、江津和也委員、松本聡委員、池田京子委員、和田多恵子委員、髙橋良子委員、山本明世委員、保髙知子委員、上内有里委員、土田麻子委員、藤﨑万裕委員

４　事 務 局

菅井健康福祉部長（途中退席）、今井こども支援課長、大伯幼児保育課長、本間健康増進課長、髙橋こども総合相談室長、宗川子育て支援センター所長、佐藤こども発達センター所長、舘岡健康増進課主幹、荒川幼児保育課主幹、宇賀南初富保育園長、畠山こども支援課長補佐、松沼幼児保育支援係長、木村こども支援課副主幹、工藤主事（こども支援課）

５　その他出席者

ジャパン総研株式会社（計画策定業務委託受託者）

６　記　録

傍聴者　２人

７　議　題

（１）開　　会

（２）会長・副会長の選任について

（３）次期鎌ケ谷市子ども・子育て支援事業計画【素案】について

（４）そ の 他

（５）閉　　会

８　配布資料

次第

配布資料一覧

資料１　　鎌ケ谷市子ども・子育て会議委員名簿

資料２　　第２期鎌ケ谷市子ども・子育て事業計画（素案）

参考資料１　鎌ケ谷市子ども・子育て支援事業計画（現行計画書）

９　会議内容

≪議題≫

（１）開　　会

１　配布資料確認

２　傍聴人入場

３　部長あいさつ

菅井部長　挨拶

４　委員・事務局自己紹介

（２）会長・副会長の選任について

委員からの推薦により、会長は山本幸子委員、副会長は江津和也委員に決定した。

（３）次期鎌ケ谷市子ども・子育て支援事業計画【素案】について

１　事務局が欠席者・議事録署名人について説明

（欠席者３名　会沢治郎委員、渡部郷勝委員、北尾法之委員）

（議事録署名人２名　松本聡委員、池田京子委員）

２　事務局が資料２に基づき説明（前半部分）

３　質疑応答

松本委員　　基本理念について。「すべての子どもが」という文言からスタートしている。鎌ケ谷市の計画において「子ども」は具体的に何歳から何歳を想定しているか。

事務局　　「子ども」とは０歳～１８歳未満であるが、本計画では子育て支援が必要とされる未就学児・小学生が比較的中心となる。

山本委員　　私は、幼稚園の園長を務めており、私の園では保護者と園長との面談を年１回実施している。毎年約９０パーセントの保護者が希望され面談を何十年もの間続けている。その中で十数年前から気になっている相談内容がある。それは最近新聞やネット上に多く出ている言葉「放置児（ご）」だ。要するにお母さんがお子さんを放って

おく。（保護者が）良く知らない子どもが家に遊びに来て勝手に冷蔵庫を開けてしまって対応に困っている等。幼稚園の問題と全く関係ないが、このように保護者が困った現状が散見される時代になっていると思う。こういった放置児が、どういった背景からきているのか、根っこの部分は一体何なのかを今後策定会議で取り上げていく必要があると思う。先程基本理念の話で「すべての子ども」といった話があったように、将来令和の時代を背負って立つ子ども達がこのような状況にあることを考えると、もっと大きな部分で歯車が狂っていると私は毎年保護者と話して感じている。是非こういった会議で鎌ケ谷市としてどのような施策を取っていくべきかを念頭に置きながら進めていく必要があると思っている。

会長　他の幼稚園・保育園で保護者の方から話があるか。

保髙委員　そこまでの話はない。保育園に通っていて小学校へ入学したら学童保育へ通うお子さんが多い。その学童保育で友達同士のトラブル等が心配になるといった相談は何件かある。

会長　髙橋委員いかがか。

髙橋委員　保育園に通っている方からそういった悩みは聞かない。ただ働いているお母さんが増えていくなかで、ここ数年スマートフォンばかり見ていて、子どもと瞳を交わす時間の少ない親が、増えている。子どもと瞳を交わして触れ合う時間が少しずつ減ってきている。もちろん働いていても愛情を注いでいる親もいるが、（親が）働きやすくなったことが、子どもにとって本当にいい時代なのか。寂しい、満たされないと感じている子どもが増えていると思う。

会長　私も放置児という言葉を今日はじめて知った。小さいお子さんをお持ちの委員は、いかがか。

土田委員　言葉自体は聞いたことがある。まだ私の子どもは小さくて親が付いているので、そういった状況はない。私の友人の話になるが、子どもが小学校の学童に通っていたが、学童内でいじめにあって学童を辞めてしまい、登校拒否になり学校自体へ行かなくなってしまった。友人は働いていなかったため、子どもの面倒を見ていたが、もし共働き家庭だった場合、子どもとしっかり向き合えるのか不安だ。ただ働くことは決して悪いことではないので難しい問題だと思う。

和田委員　私はずっと専業主婦で子育てをしてきた。学校へ行くようになる

と母親が仕事をしている家庭としていない家庭にはっきりと分かれる。長期休みに入ると、どうしても専業主婦の家庭がターゲットになり子ども達が集中して遊びにきていた。私の子どもは、もう３０歳になるがその子が小さい頃から放置児のような子どもはいた。主任児童委員を務めるようになり、学校へ訪問する機会が多くなった。そこで感じたのは、中学生でも男女関係なく先生にスキンシップを求める子どもが目立つ。私が中学生くらいの時期に親以外の大人にベタベタすることは考えられなかったが、今の子ども達は、幼児期にスキンシップの体験が少なく、その頃の感覚から抜けきれないのではと見ていた。

会長　　松本委員学校の現状としては、いかがか。

松本委員　　私も放置児という言葉をはじめて聞いたので、早速勉強したい。山本委員の意見を聞いて、学校の現状としてこういった事例は珍しいことではないと感じている。それがやがて小学校・学童保育でのトラブル、不登校などへ発展するある種のルートではないかと考えている。本校でも３名の不登校生徒がいる。１名は家庭の方針でフリースクールへ通っているので心配はない。それ以外の２名について、まさに放置児に当てはまる状況にあると思う。具体的な話は控えるが、夜保護者が家にいない、家に保護者はいても、いわゆるネグレクト状態にありほとんど面倒を見ない。不登校の子どもが小さな子どもの面倒を見ているといった状況があるのが事実だ。非常に少ないケースだが、少ないからこそこれから先に、同じことが起きる可能性があると捉えていく必要があると痛感している。この件については幼稚園・保育園・小学校といった枠を取り払って情報共有していく方針。それから中学校・高等学校との連携を、どうしていくかといった点で「すべての子ども」が１８歳未満であると説明があったように長いスパンで各学校の先生方を巻き込んで考えていく必要があると強く考えている。

会長　　副会長いかがか。鎌ケ谷市だけではなく千葉県や全国でもあるか。

副会長　　詳しいことはわからないが、児童福祉、こども家庭支援が叫ばれているので、千葉県だけの問題ではないと思う。

事務局　　本当に稀だが、児童センターなどでお弁当を持ってこないで一日過ごす家庭も見受けられる。鎌ケ谷市は非常にコンパクトで、職員

同士の連携がかなり取れている。こういったケースでは児童センターの職員が学校、主任児童委員、保健師、総合相談室（虐待担当）と常に連携を図って情報共有をし、該当する家庭へのきめ細かな支援ができる体制を整えている。例えばネグレクトだと家庭児童相談室が入って必要に応じて児童相談所などが対応している。コンパクトな市だからこそ各関係機関で、きめ細やかな連携を図り対応できる。情報があれば、すぐにこども支援課へ知らせて頂きたい。こども支援課から家庭への支援が可能だ。

会長　　こども支援課へ相談いただいて、そういった事例があれば適切な取り組みをしていただきたい。

山本委員　　結局は、そういった話をできる相手がいない点が問題だと私は思っている。困ったことがあったときに、保護者同士で話すだけで終わっている。それがたまたま私の耳に入った形だと思う。

会長　　そういったことは、すごく大事だ。

山本委員　　相談した保護者によると、相手のお母さんが見えないと言っている。それでどう対処していいかわからないと。

会長　　相談する場所がたくさんあるので、一声かけていただきたい。他になければ次へ進めたい。

３　事務局が資料２に基づき説明（後半部分）

４　質疑応答

松本委員　　４９ページ放課後児童クラブについて。小学校と放課後児童クラブとの連携が大事だと痛感している。放課後児童指導支援員について認定・資格の規定などあれば教えていただきたい。それから放課後児童クラブで児童がけがをした、急病になった場合学校は、どのように対応すべきか教えていただきたい。

事務局　　放課後児童指導支援員の資格は保育士・教員免許を持っている者、又は放課後児童クラブに２年以上従事している者については県の資格認定研修を終えると放課後児童指導支援員の資格が取得できる。けがの対応については、基本的に軽いけがであれば問題ないが、重いけがで病院に行く必要があれば、市のこども支援課の職員が、保護者へ連絡して病院へ付き添う。それから緊急の場合は救急車を呼ぶなどの対応もある。学校の養護教員の方へアドバイス頂くこと

もあり、引き続き、学校とも連携を図っていく

副会長　５７ページ地域子育て支援拠点事業について。「質（サービス）の向上策」で利用者にアンケートを実施しニーズを把握してより良いサービスをと記載されている。５７ページに「気軽に参加」とあるが、実際利用が少ない乳児の家庭に対する対策をどのようにお考えか。

事務局　「つどいの広場」に参加してもらうため、保健推進員が、乳児戸別訪問へ行った際に紹介するなど様々な周知を図っている。今後も、少しずつ外へ出ていけるように保健推進員、主任児童委員、保健師が連携を取りながら支援を行うなど「つどいの広場」へ参加できるといったルートをつくっていく。

事務局　追加で「ウエルカムベビースクール」を健康増進課で新しくママになった方対象で行っている。子育て支援課も一緒に参加し「つどいの広場」などの情報提供を、随時行っている。またホームページなどでも情報発信をしている。

藤﨑委員　第一子のときは、乳児家庭全戸訪問事業で助産師さんに訪問していただいた。第二子のときは、保健推進員さんが中心となって訪問していただいた。０歳～６ヶ月の間は、保育園の一時預かりも利用できず、ファミリーサポートセンターにも頼れない。乳児家庭全戸訪問事業は自宅にいて気軽に行政の方と関われる貴重な機会だと利用者として感じた。訪問で「つどいの広場」などの情報提供もあり気軽に参加するようになるが、実際参加してみると「つどいの広場」は午前９時～午後３時までなので、午後に参加するとプログラムがないため、ただ置いてある遊具で子どもを遊ばせて、気の合うお母さんと少し喋るくらいだ。午前中だと保育士さんなどもいてプログラムが充実し、多くのお母さんとの交流ができるかもしれないが、利用者としては、午後にも少しプログラムがあるといいと思っている。乳児家庭全戸訪問が始めのセーフティーネットとして非常に役に立っているので、「つどいの広場」によって地域の拠点ができる意味でも、この２つの事業は大事だと思う。

事務局　午後のプログラムについて。午後は、ゆったりと過ごしたいといった方が多いため、何かを改めて開催するのではなく遊具の設定などで進めている。

藤﨑委員　お昼に掛かってしまうと昼食の準備などがあり、いろいろ考えてしまうので、午後に参加が多いが、そうなると交流の機会を活かせなかったと感じている。

事務局　現状午前中の利用が多いため、午前中にプログラムを設定している。ただ藤﨑委員の意見で、そういったニーズがあると把握できた。アンケート調査なども実施しているので、午後のプログラムについても意見を伺ってみてニーズが多ければ実施してみる。またニーズが少なくても月数回午後のプログラムを入れるなど検討していきたい。

池田委員　いまお母さんたちのニーズが多様化している。これに対する対応も実は大変だ。お母さん達の交流の場だけではなく、これからお子さんが幼稚園・保育園・学校へ上がっていくために朝しっかり起きて、お昼を食べて、お昼寝をするといった規則正しいリズムをつくる意味でも、公共の場に参加することを目的として頂けたらいいと思う。

会長　各場所でお母さん、お子さんの相談に乗り、話し相手になっているのが鎌ケ谷市の主任児童委員だ。近くのコミュニティセンターの児童委員と顔なじみになっていただけたらと思っている。

上内委員　私は出産のときに鎌ケ谷市へ転入したため、子育てをしながら友達をつくっていく状態だった。妊娠中の検診で友人ができたりした。妊娠中の集まりでお母さん同士が友達になることもある。子どもが生まれてから児童館に行ったことがあるが、こういった集まりの場所だと顔なじみの方同士がグループになってしまっている。職員の方も一緒になってグループになってしまっていた。私は、それ以来そこへは行かなくなった。コミュニティセンターで開催された集いへ参加してみたが、私は孤立してしまい研修の学生の方とお話するだけで終わった。結局お母さん達との交流は、そこでは生まれなかった。私は義母と一緒に住んでいるので、孤立することはないが、周りに誰もいない方は孤立してしまうと思う。児童センターの方もお母さん達の話を聞いていると思うが、新しい方が入ってきたら、ほかのお母さん達とつながるような配慮をしていただけると孤立は少なくなると思う。

事務局　職員にも、なるべくみなさんへ公平に声をかけるようご意見を伝

えておく。またはじめての方、久しぶりの方について配慮するように実践しているが、まだまだ足りなかった部分があるので、今後参考にしていきたい。

会長　　他はいかがか。意見がないようなので議題の審議は終了する。その他について事務局お願いする。

１０　その他

事務局より、次回会議の開催予定について説明

１１　閉会

以上、会議の経過を記載し、相違ないことを証明するため、次に署名する。

令和２年２月１２日

氏　　名　　松　本　　聡

氏　　名　　池　田　　京　子